

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00688

研究課題名(和文)日本語教育におけるシャドーイングの効果と教材開発に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Effects of Shadowing and Teaching Material Development in Japanese Language Education

研究代表者

深見 兼孝 (FUKAMI, Kanetaka)

広島大学・森戸国際高等教育学院・准教授

研究者番号：20173312

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：初級レベルの日本語学習者のシャドーイングに対する自己評価に関して研究を行い、評価に一定のパターンがあるかもしれないこと、学習者は個々の音声の誤りに早期に気づいていることがわかった。また、指導面では自己のパフォーマンスに対する自覚を促す工夫が必要であることがわかった。このほか、学習者のシャドーイングパフォーマンスについてのコーパス構築の可能性と、シャドーイングの研究と実践指導への有用性に関する研究、シャドーイングと記憶・認知の関係に関する研究を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語教育においてシャドーイングが有効な方法であることは知られていたが、シャドーイングを行うことで学習者のパフォーマンスに何が生じるのか、具体的にシャドーイングをどう指導すればいいのか、シャドーイングのデータの収集と扱いにどんな可能性があるか、シャドーイングと言語習得の認知的関係や基盤はどうなっているか、などについて研究を進めることができたのは、意義があると思われる。

研究成果の概要(英文)：We studied on self-evaluation on performance in shadowing of elementary level learners of Japanese and found that there may be patterns in their self-evaluation, and found they noticed their own errors in the performance from early period. We also found that, in instruction, we need to assist learners to be aware and conscious of their performance in shadowing. Besides we studied possibility of building a corpus of learners' performance in shadowing and its usefulness in research and instruction, and we studied on the relation of shadowing and memory/cognition.

研究分野：日本語・韓国語対照研究、日本語教育

キーワード：シャドーイング

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語教育におけるシャドーイングの、発音や聞き取り能力に関する有効性はすでに知られていたが、シャドーイングの実践が少なく、あったとしても主に上級レベルで行われ、次のことが明らかでなかった。

発音や聞き取り能力以外の能力、すなわち、読解力や文法力、構文構成力の向上にも寄与するかどうか。

レベルの違いによるシャドーイングの効果的な教材、実践や有効性に差があるかどうか、あるとしたらどのような差があるか。

(2) 新しい教育としてアクティブラーニングが注目されているものの、具体的な報告が多くなかった。

2. 研究の目的

日本語教育のシャドーイングの指導と教材開発を目標とし、学習者のアクティブラーニングを実践しながら、次のことを遂行することを目的とした。

(1) レベル別(初級・中級)のシャドーイングの実践と成果

(2) ニーズ別(文法・構文・読解)のシャドーイングの実践と効果。

文法では化石化した文法項目に対する効果

構文では複文生成への効果。特に、接続表現や連体修飾節の生成に対する効果。

シャドーイングによる言語処理能力向上の読解能力への効果

(3) アクティブラーニングに基づくシャドーイング教材の開発

3. 研究の方法

以下のような方法をとることとした。

(1) 各レベル・各クラスでシャドーイングを実施、その効果と方法についての可能性と課題を明らかにする。シャドーイング実施については、次のことを計画した。

レベルごとの教材を準備、学生が自宅でも使えるよう共有ファイルにする。

各クラスで、一定の方法にしたがってシャドーイングを行う。

(2) 文法、構文、読解の養成に絞ってシャドーイングを実施する。

(3) 以上の成果をもとに、学習者が自分でシャドーイングの目標(スキル)と教材、学習プランを選択できるよう導き、それに沿ってシャドーイングを実施する。

4. 研究成果

(1) 1年目:

学習者のパソコンやスマホにダウンロードができるシャドーイング教材(初級用)を作成した。初級の一部のコースでは学習者に対しシャドーインへの態度に関するアンケートを実施、その結果を口頭発表した。

その他のコースでも一部シャドーイングの実践を開始し、それ以外でも学生にシャドーイングをみずから実践してみることを広く呼びかけ、フィードバックは授業以外にも、そのような学生のための時間を特別に設けて行った。

言語習得データに基づいたシャドーイングの効果と指導法についての研究を行い、その成果を口頭発表や講演で公開した。シャドーイング力と一般的な第二言語コミュニケーションにおける学習適性の関連に関しても研究を行い、その成果を口頭発表した。

国内外の日本語シャドーイング指導者のための指導書の執筆も計画、執筆を開始した。あわせて、2年目からのシャドーイングの本格的な実践に備え、実施を担当する予定の人々に対しシャドーイング研修会(講演とワークショップ)を実施した。

英語に特化してはいるが、シャドーイングの原理と、その効果と指導法の研究を行い、その成果を英語リスニングに関するハンドブックに反映した。

(2) 2年目: ニーズ(文法、構文構成力・読解力)という観点からシャドーイングの実践と効果を研究する計画であったが、実施できなかった。また、全レベルを対象にシャドーイングの実践・研究を行うことにしていたが、全レベルでの実践・研究はできなかった。しかし、シャドーイングの指導法に関する研究、シャドーイングに対する学習者の自己評価、およびその時間軸に沿った変化に関する研究を継続し、これらの研究結果を公開した。

指導法に関しては、ステップを踏んだ練習を取り入れること、自己のパフォーマンスに関する

る自覚を促すことが重要であることがわかった。

自己評価では「できたかどうか」に自己判定の変化には一定のパターンがあるかもしれないこと、また「できなかった点」に関しては、教員が気付くような分節音の音声上の誤りが早期に学習者自身に気付かれていることがわかった（ただし、自力で修正できるとは限らない）。

シャドーイングの自己評価を行ったクラスでは、1年目から継続してシャドーイングが学習者同士の相互批評の形でなされており、シャドーイング練習の新しい形態を引き続き模索することができた。あわせて、日記の記載方法についても改善に向けて検討材料が見つかった。

(3) 3年目：コロナ禍と研究分担者一人の休職により、日本語シャドーイングの日本語習得に与える影響に関する全体での研究ができなかった。しかし、

研究分担者のシャドーイングに関わる個々の関心事に関して、学習者のシャドーイングのパフォーマンスをコーパスに取り込むことの、日本語教育への応用およびその可能性に関する研究がある。この研究は、シャドーイングを日本語教育における実践と結びつける、新たな方向を見いだそうとするものである。

また、英語だが、シャドーイングの効果と実践に関する研究がある。この研究成果はシャドーイングの認知および教育における理論的基盤をより深めたもので、日本語のシャドーイングにも共通する点が多く、日本語シャドーイングの理解も深めることに貢献し、シャドーイングの実践に大いに参考になりうる。これらの研究は、とりわけ研究計画を立案するにあたっても有用である。

言語習得と記憶および認知の関係に関する研究があり、これはシャドーイングと記憶・認知の関係を考える上で貢献している。

(4) 4年目：

研究期間を延長し、授業中ではなく、日本語学習者（留学生）の中から被験者を募集し、かれらに対しシャドーイングを実施、その効果に関するデータをとって、当初の課題である日本語シャドーイングの日本語習得に与える影響に関する全体での研究を行おうとしたが、コロナ禍が継続し、できなかった。留学生は新学期がはじまっても遅れてきたり、ばらばらに來たり、あるいは日本に來れないものも多くいて、募集をかけることさえできず、データはとれなかった。夏休み、あるいはぎりぎり冬休みでの実施も考えてみたが、年度を通して状況は変わらなかった。他の日本語教育機関との協力も考えてみたが、事情は似たり寄ったりで、結局断念せざるを得なかった。また、研究分担者の往来も不可能であった。しかし、

英語におけるシャドーイングの評価、聴解における音声・意味処理の過程や学習者（音声）コーパスの構築と有用性に関する諸問題など、引き続き、研究分担者のシャドーイングに関わる個別的な関心事に関して研究を継続した。

研究の分量は多くはなかったが、研究分担者の個別的な研究は、今後とも継続が不可能ではないと思われた。そこで、コロナ禍が収まって留学生が正常に來日すれば、2022年度もさらに研究期間を延長する意義があると思われたが、2022年度も留学生は來日が遅れることは確実で、前期中に実施することは不可能である。さらに、今後も状況が不透明であることに加え、研究代表者が2021年度をもって退職するので、本研究はこれで終了とした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 迫田久美子	4. 巻 32
2. 論文標題 異なった学習環境における日本語使用の正確さと複雑さ - 日本語学習者コーパス (I-JAS) の分析に基づいて -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 計量国語学	6. 最初と最後の頁 403-418
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 柳本大地	4. 巻 51
2. 論文標題 韓国語を母語とする学習者の日本語漢字単語の聴覚的認知 プライミング効果を利用した意味-一致性判断課題を通して (韓国語)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 115-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.21808/KJJE.51.07	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 王 金芝・柳本大地	4. 巻 20
2. 論文標題 第二言語日本語学習者における逐次通訳の記憶メカニズム 音韻情報と意味情報の保持に着目した実験的検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 通訳翻訳研究	6. 最初と最後の頁 81-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.50837/its.2005	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 深見兼孝	4. 巻 2
2. 論文標題 シャドーイングにおける初級日本語学習者の自己評価-ポートフォリオの記述から-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島大学森戸国際高等教育学院紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 迫田久美子	4. 巻 3号
2. 論文標題 コミュニケーション能力を伸ばすには？ コーパスから学ぶ学習者中心の教え方	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 キルギス日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計21件 (うち招待講演 8件 / うち国際学会 8件)

1. 発表者名 迫田久美子
2. 発表標題 学習者コーパスから学ぶ 日本語教育現場での指導 - I-JASに見る文法習得と母語の影響 -
3. 学会等名 学習者コーパス完成記念シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 迫田久美子
2. 発表標題 コーパスに見る学習者の学び方 誤用は なぜ生まれるのかー
3. 学会等名 JLESA南アジア日本語教育フォーラム (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Teruaki Oka, Yuichi Ishimoto, Yutaka Yagi, Takenori Nakamura, Masayuki Asahara, Kikuo Maekawa, Toshinobu Ogiso, Hanae Koiso, Kumiko Sakoda & Kibe Nobuko
2. 発表標題 KOTONOHA: A Corpus Concordance System for Skewer-Searching NINJAL Corpora
3. 学会等名 Conference on Language Resources and Evaluation (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 門田修平
2. 発表標題 Exploring the Input Effect of Shadowing Training in L2 Acquisition
3. 学会等名 ESRC UK-Japan Connection Project 2019-2020 (ESRC/JSLARF 国際シンポジウム) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 畑江美佳・門田修平・湯地宏樹
2. 発表標題 ピクチャーカードを見る児童の眼球運動分析：発音の有無・絵と文字表記の上下位置関係・学年が視覚英単語処理に与える影響
3. 学会等名 小学校英語教育学会 岐阜大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 深見兼孝
2. 発表標題 シャドーイングにおける初級日本語学習者の気づき：ポートフォリオの記述から
3. 学会等名 日本総合学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 門田修平
2. 発表標題 Assessing Shadowing Practice for L2 Listening: An Input Effect
3. 学会等名 17th Asia TEFL (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Daichi, Yanamoto
2. 発表標題 An experimental study on shadowing and the information processing speed of the working memory.
3. 学会等名 Japanese Studies Association of Australia
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 深見兼孝、柳本大地
2. 発表標題 初級日本語学習者におけるシャドーイング-試験的实践報告と今後の方向性-
3. 学会等名 日本総合学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 迫田久美子
2. 発表標題 日本語教育におけるコミュニケーション能力の養成 持続可能な社会の構築を目指して
3. 学会等名 2018年中國文化大學外國語文學院日本語文學系國際學術研討會（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 迫田久美子
2. 発表標題 コミュニケーション能力を伸ばすには？
3. 学会等名 第2回キルギス日本学・日本語教育国際研究大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 迫田久美子
2. 発表標題 学習者コーパス研究の可能性 日本語学習者のデータから学ぶ日本語の教え方
3. 学会等名 西安日本語教師研修会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 迫田久美子
2. 発表標題 学習者のデータから考える日本語教育 理論は実践に役立つか
3. 学会等名 国際交流基金主催第四回「日本語教育の理論と実践を繋ぐ」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 門田修平
2. 発表標題 第二言語コミュニケーションの学習適性を測定する復唱（シャドーイング）力
3. 学会等名 英語教育総合学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 迫田 久美子、石川 慎一郎、李 在鎬	4. 発行年 2020年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 268
3. 書名 日本語学習者コーパスI-JAS入門	

1. 著者名 Shuhei, Kadota	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 200
3. 書名 Shadowing as a Practice in L2 Acquisition: Connecting Inputs and Outputs	

1. 著者名 迫田久美子・古本裕美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 192
3. 書名 日本語教師のためのシャドーイング指導	

1. 著者名 鈴木寿一、門田修平	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 392
3. 書名 英語リスニング指導ハンドブック	

1. 著者名 Shuhei, KADOTA	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 200
3. 書名 Shadowing as a Practice in Second Language Acquisition.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	門田 修平 (KADOTA Shuhei) (20191984)	関西学院大学・法学部・教授 (34504)	
研究分担者	迫田 久美子 (SAKODA Kumiko) (80284131)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日本語教育研究領域・客員教授 (62618)	
研究分担者	柳本 大地 (YANAMOTO Daichi) (20826359)	広島大学・森戸国際高等教育学院・特任講師 (15401)	
研究分担者	C H A N S A L L Y (CHAN Sally) (60832368)	広島大学・森戸国際高等教育学院・特任助教 (15401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関